

アクロポリスの丘に立って

—ギリシア文学閑話—

呉 茂 一

新 潮 社

アカロポリスの丘おかたに立たって
—ギリシア文学閑話—

昭和五十一年三月二十五日 印刷
昭和五十一年三月三十日 発行

定価千三百円

著者 呉くれ 茂しげ 一いち

発行者 佐藤 亮 一

発行所 東京都新宿区矢来町七一
株式会社 新 潮 社

電話 業務部 東京二六六一五一一
編集部 東京二六六一五四一一
〒一六二 振替東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛送付下さい。送料小社負担にてお取替え致します。

目次

I

生と死について

——上代ギリシア人における——

11

英雄たちと「死すべきもの」

15

ことばありき

23

「見る」と「知る」

25

こころ

27

——思慮と欲情——

ヒッポクラテースの自由

30

ギリシア神話の意味

33

ギリシアの神々と日本の神々

39

シーシュポス、メーデイアその他

51

イオーンの場合

57

プラトオンと文学

60

オイディプース王について

65

エウリーピデースの悲劇

70

『ツキユディデスの場合』

77

II

「悼む」

——『オデュッセイアー』その他——

83

「時」について

89

アクロポリスの丘に立って

92

賢者ソローン	95
『詞華集』に現れる花々	98
ギリシアの鳥	105
ギリシア神話時代の装身具	111
酒とギリシア神話	114
エロスの変幻	120
——ギリシア・ローマ文学と同性愛——	
坪内逍遙とギリシア劇	127
ポンペイ古代美術展によせて	134
『ダフニスとクロエー』をめぐる	138
「太陽は日々に新しい」	144

Ⅲ

ローマの春

ローマ文化会館の思い出

イタリアの古い町で

——ペストゥム参り——

スビヤコ遊記

——皇帝ネロから聖フランシスへ——

パレストリーナそのほか

花木

輪廻

感覚の世界を抜け出した時

149

157

161

164

170

172

175

179

わが愛するうた

——津村信夫の詩——

津村さんのこと

斎藤さんのこと

茂吉先生について

横光氏のプロフィール

津田季穂展に寄せて

湘南寓居のことば

呉家と箕作家

訳詩五十余年を

「和して同ぜず」

あとがき

初出一覧

221 217 209 206 203 201 196 190 185 181

アクロポリスの丘に立って

——ギリシア文学閑話——

生と死について

—上代ギリシア人における—

このような標題を掲げたからといって、私はべつに、古代ギリシア人一般の死生観を論ずるつもりはない。そう思う人もないだろう、それは私のなしえるような労作ではないから。といって、ここにギリシア悲劇作家の作品からの引用を羅列しようと心がけるわけでもない。それははるかに易しい仕事だろうが、それでもここに取り上げるには適当でなく思われるので。つまり私はここで、ただ数人のソークラテース前派の哲人たちの思索のあとを追跡しようと心がける、というのも彼らが特に私たちと同様、思いをここに致したと、数少い断章の間にも見て取られるからである。

人も知るように、古代ギリシアの人々は、人間のことを *protos* 複数で *protoi* と呼んだ、「死ぬべきもの」の義である。人間の代名詞として呼び慣らわし、この意味があまり明晰に感じとられなくなった場合は *thnetoi* と呼んだ、やはり「死すべきもの」の義である。ホメーロスではプロトスが『イーリアス』に四十三度、『オデュッセイア』に七十一度（ゲーリングによる）も出てくる、トネートスは両者合わせて四十一度である。

これらの場合をいちいち精査して論ずるのも多少は興があらうが、今はその場ではない。ただしばし^{バシ}ゼウス大神が高まから人間世界を見下ろし、田畠のみのりを食うて生きる、憐れむべき、一日限りの生を享けるもの、と呼ぶのを聞く。しかし歌唱者はむしろ彼ら（人間ども）の驕りを戒める如くである。つまり人間は一瞬たりとも自分がそうした可死者であるのを忘れ、驕慢に走ってはいらないと。

おそらくこれは、古代ギリシアの人々がともすればそうした驕慢の傾向を有したのによるであろう。現代の青年といわず人みなも、ともすれば押しなべて驕慢か倨傲か、さもなければ精神的か肉体的かの懶惰に陥りやすく、神々も呆れはて彼らの上に、サルモーンネウスかタンタロスかのように、処罰の鞭を下すのも忘れはてられたようである。われわれはむしろブルータルコス^{ブルタルコス}の“De sera numinis vindicta”（神罰の下ることの遅さについて）を誦し返さねばならぬであらう。

つまりは死も、古代ギリシア人においては、生に対してだけ意義をもつものだったといえよう。彼らは生きており、生きようと欲していたからである、いわば死は生人の一種の刺激剤みたようなものだったかのように。「弓の名はビオス（生と同じ綴り、アクセントだけ違う）、その仕事（結果）は死」だというヘーラクレイトスの言葉も、「われわれは魂の死を生き、魂はわれわれの死を生きる」という同人の言葉も、そこに結着が見られるものであらうか。

「死なぬ者が死ぬ者であり、死ぬ者が死なぬ者なのだ。たがいに他の死を生き、他の生を死んでいく。」「たましいにとつての悦びは、うるおいを得ることだ。われわれは魂の死を生き、魂はわれわれの死を生きる。」これらの言葉は彼らしく玄晦であり、禅宗の公案とさも似ている。ここではわれわれは一応魂とは他者のごとくである。魂はうるおいを得て悦ぶ。現在する人間はうるおいを欠

く者に違いない。

「太陽は日々に新しい」と彼はいう、「神にとっては、すべてが美であり、善であり、正である」とも。美醜を分かつのは人間らしい。しかし彼は欲望を戒め、思い上がり、勝手な振舞、ヒュブリスを敵に退ける、大火より以上にこれの消火につとめねばならぬと。法を守り正心を保ってゆく、こうした地道な生き方、結局は自由も放縦もそこへ落着くと彼は見るらしい。

「まことに神々は、はじめからすべてを（死ぬべき）人間どもに示しはしなかった。人間は時と共に探求によって、よりよいものを発見してゆく」とクセノパネースは言っている。馬は馬に似た神を、牛は牛の姿をした神々を、といったからとて、決して彼は無神論者ではなかった、偶像破壊論者ではあったろうが。そうした固定観念は二千数百年前も、あるはいっそう、強かったであろうから。「神はただ一つ、姿でも思惟でも、死ぬべき人間とは少しも似ていない。神はつねに同じところに止まって、少しも動かない」云々と彼は言っているから。

「もし幸福が肉体をよろこばすことにあつたら」という条件はヘーラクレイトスのものか否かを疑われているが、ろばや豚やを例に引いて、単なる欲望の充足や観せかけだけの享樂の空しさ愚かしさを彼は指摘している。生とはそうしたものに意義があるとは彼は少しも認めなかった。「黄金を探す者は、少しの黄金を見つけるのに、多くの土を掘る」と。おそらく真実の幸福を知るために、われわれは多くの苦悩をもたねばならぬ、というのかも知れない。「最上の人は、全てを捨てても、一つを拒ぶ。不朽のはまれをとって、死滅すべきものを捨てて。しかし大多数の人間は、さながら家畜のように飽食するだけですんでいる。」ここで彼が、不朽のはまれというのは、いわば一つの成句のようなもので、必ずしも名誉とか名聞とか名聞とかいうのではないと思われる。なぜなら彼は「榮譽

は神々をも人間をも奴隷にする」とも言っているらしいから。もとよりここで、彼は名譽レオスと榮譽テリオンと、違った呼び方をしているが、前者は字義通りでは「聞こえ」である。しかしホメーロス以来この語の内容はいつしか深められ、もっと言わば主観的な、内面的なものに化しているかに窺われる。

「この全体の秩序タキスは、神や人の誰かがこれを造ったといったものではない、むしろいつもあったのだ。今もあり、これからもあるだろう、そしていつも生きている火として、定まっただけ燃え、きまっただけ消えながら。」この初めの語はコスモスだが、この世界の根元を火とする考えは、上代ギリシアの多くの自然哲学者にひろく互って把持された見解であり、原子論のデモクリトスなどもこれに含めることができたであろう。火は実体がないといえる、しかし万物もひっきょう実体がないので、ありとするのはわれわれの感覚の所作である。消えた火、死、物体、それに対して生きている火、燃える火、生。人間はそのいずれに与与るのだろうか、たえず燃え、たえず死にながら。「死後に人間を待っているのは、彼らが予測もしなければ、思いがけもしないようなもの」だという。

われわれはそれをもとより知らない。そして彼の言葉を疑う。しかし人間を造り出したもの、それはこの火の力であるに違いないのだ。それは生きた火として次々に燃えつづけ、消えることがない。なぜならコスモスの根元は火であるから、火はそれ自身の存在理由をもつてであろう。「ある」とこと自体がその証明をなすであろう。

* — 語録はおおむね田中美知太郎氏および藤沢令夫氏の訳に従った。